

京都市・乙訓地域公立高等学校入学者選抜に係る懇談会（第3回）
の概要について

1 日 時 平成19年5月21日（月） 午後5時～午後6時40分

2 場 所 ルビノ京都堀川 「ひえい」の間

3 概 要

（1）事務局からの説明

第2回懇談会の概要説明（説明後に報告概要の確認）

（2）意見交換

主な内容は下記のとおり

- 総合選抜は、基本的に残して欲しい。通学圏は、2ではなくて4でも良い。学校を選べる子には広く選べ、選びにくい子は近くの学校に行けるようにしてやりたい。
- 交通機関の充実、生徒のニーズの拡大ということは否めない事実だが、総合選抜制度、4通学圏の良さは残していくべき。通学のために多額な交通費が負担できず、中学校時代の仲間とともに、地域の公立普通科に進学したいという生徒、保護者は少なくない。地域性のある高校だから生徒たちが支えられてきた部分がある。市域を1通学圏にすると、地域性が失われるとともに、20校以上の高校から進学先を選ぶこととなり、進路指導が非常に困難となる。塾任せの進路指導になる可能性がある。教育費に負担をかけられない家庭がある中で、通学圏の拡大は2通学圏程度が望ましい。
- 改革・改善は痛みを伴う。一番大きなメリットが何かという視点で考えないといつまでたっても選択肢の幅が広がらない。子どもたちにとって選択肢の幅を広げられる方向は何か、一番大きなメリットは何かという視点で考えることが、府民、保護者のニーズ、期待に応えることではないか。
- 基本的には、1通学圏で単独選抜のわかりやすい制度にすべきだが、進路指導の立場から難しいのであれば、Ⅰ類・Ⅱ類ともに一部圏を越えて入学できるシステムが必要ではないか。また、地域性、通学の利便性、交通機関にも配慮した通学圏の設定をお願いしたい。
- 1通学圏でも4通学圏でもどちらでも良いが、中学校と高校が連携して保護者・生徒に情報を伝え、進路の方向を教えてほしい。
- 他の通学圏にどうしても行きたいという生徒のために、一定の条件を付けて他圏の学校を志願できるような制度を考えてほしい。

- 高校を選ぶのは結局子どもであり、単独選抜で行きたい学校に行かせてやりたい。
- 総合選抜を実施すれば高校に地元の子どもが来るが、地元の子どもが希望して来てくれるのが理想である。1通学圏・単独選抜になっても、各高校が中3生にアピールし、いいところを見てもらいながら頑張っていけるのではないか。
- 制度改善は教師の踏ん張りにもつながるという意味でも必要と思う。ただ、1通学圏にすると生徒の通学時間の負担や中学校における進路指導上の課題も出てくるので、2つくらいが適当。また、総合選抜制度の良さも残していくべきである。更には学区の変更に伴い、入試の方法も見直し、普通科で受験機会の複数化を実施したら良い。高校の評価が、有名大学の進学率という尺度だけで固定化されるのは良くない。入学した高校の学力面の評価で卑屈な思いをさせることは避けなければならない。
- 2通学圏の中で、他圏も志願できるシステムは必要と考える。一挙に1通学圏にすると、序列化が生じたり、経済的に困難な家庭は遠方の高校を選択できない等デメリットの部分が大きい。高校への志望の気持ちや学習成績の高さだけを求めると公教育は成り立たない。
- 高校に入学してきた生徒が、皆希望どおりかと言えばそうではない。部活・特活の20%枠があるが限られており、部活・特活以外の希望にはチャンスがない。通学圏を4から2にするのでは本質的に変わらないが、1通学圏にすることで、生徒の選ぶ質が全く変わる。希望を持って入った生徒を高校は責任を持って育てる。学校によっては指導に非常に苦しい学校も出てくるかもしれないが、それぞれの特色の中で痛みを伴って責任を持たなければならない。
- 1通学圏にしても希望する高校を受検できるだけで、皆が希望する高校へ行けるわけではない。結局行きたくない学校に行くことになる生徒が多数生ずる。現行制度の良さを残していく必要がある。通学圏を2つくらいにし、今の20%枠をどこでも受検できるようにすれば良いのではないか。単独選抜で行きたい学校に行けるのは一握りの生徒。
- 生徒の希望をかなえてやるには、単独選抜である。周りの保護者も同意見である。
- 保護者・生徒がしっかりとした対応ができるのなら、通学圏は1でも2でも4でも良いが、どこでも受けられるということは、傷つく子どもも増えるという見方もできる。遠くの学校に行くというのは、地域の保護者同士の連携について、保護者にとって不安な部分もある。

- 総合選抜の最大のデメリットは、年度によって境界線が異なり、兄弟で行く学校が変わってしまうことだ。学校に対する評価は、学校の努力によって変わる。通学圏が広がり、それぞれの学校が特色を出して頑張れば、公立高校全体が良くなる。
- 専門学科を選択する生徒と違い、公立 I 類を選択する層は目的意識があまり強くない。通学圏の拡大は必要だが、選択幅を拡大することで一部の情報しかつかめず、自分の思いと違うことになっては困る。保護者・子どもの実態から、2 通学圏が適切ではないか。部活・特活枠で通学圏を越えて受検できればベターだ。
- 通学区域の拡大により、意識の高い子、意欲のある子にとっては、選択幅が広がりメリットがある。しかし、高校に行けたら良いという生徒や、経済的な負担のからない近くの高校へ行かせたいという親もいることを考えると、2 通学圏で総合選抜を維持してほしい。
- I 類は一つの高校しか行けない中、住所を変えてでも他へ行きたいという人もいる。親としては、頑張っているクラブで高校を選ばせてやりたい。中学校は、卒業生全員を高校に入学させることしか考えていないのでは。
- 地域性ということに関して、小学校、中学校、高校、大学と、それぞれの地域がある中で、地元の生徒が入学すれば地域性があるとは必ずしも言えない。学校が地域と連携し、施設や人的資源を地域に還元することが地域性につながるので、高校側も地域性の意味を広く捉えるべきだと思う。
- 制度の変更に当たっては、生徒が希望を持って高校に入学し、自分の能力や個性を磨いて成長していけるようにすることが大事。生徒が主体的に学校を選択し、意欲的に取り組むためには通学圏の拡大が望ましいが、円滑な進路指導、地域に根ざした教育を推進するという観点から、無制限ではない方が良いのではないか。したがって、4 通学圏を 1 か 2 という議論が多かったが、その中で、2 通学圏が良いのではないだろうか。ただ、その場合においては、希望に沿う観点からも、2 通学圏にして通学圏を越えるシステムも必要ではないか、といったことが意見の大勢であった。